

「ペラウ国立博物館開館 50 周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」について
-その2 パラオ熱帯生物研究所の復元-

準会員○柏木史成*¹ 正会員 辻原万規彦*² 同 今村仁美*³ 準会員 岩田紘明*⁴
準会員 古内佐知*¹ 同 山本美沙*¹ 正会員 岡本孝美*⁴

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史

南洋群島, 日本学術振興会, 南洋庁, 珊瑚礁, 復元

1. はじめに

筆者らは, 2001 年以来, パラオ共和国に残る日本統治時代の建築物に関する研究を続けてきた^{1), 2), 3)}。これまでの研究成果を基に, 2005 年 9 月 30 日から 2006 年 3 月末日までの予定で, 同国ペラウ国立博物館において, 日本統治時代の建築物に関する展示を行っている。前報「その 1」に続き, 本報では, この展示のために復元を行った日本学術振興会傘下のパラオ熱帯生物研究所の詳細について報告する。

パラオ熱帯生物研究所の活動については, 同研究所が発行した和文雑誌『科学南洋』(1 巻 1 号~5 巻 2 号 (1938.6~1943.3), 15 号 (1944.6)) (以下, 例えば 1 巻 1 号の 1 ページを「科学南洋 (1-1, p. 1)」などと表す), 欧文雑誌『Palao Tropical Biological Station Studies』(第 1 巻 1 号 (1937.3) ~第 2 巻 4 号 (1944.5)) ならびに関係者の親睦団体の機関誌『岩山会会報』(1 号 (1939.6) ~18 号 (1993.12)) (以下, 「会報 (1, p. 1)」などと表す。) に詳しい。また, 近年のものでは, 坂野の研究⁴⁾ や大森の記事⁵⁾, さらに元研究員の元田の報告⁶⁾ などがある。

なお本報では, 当時の用語や呼称をそのまま用いた。また以下では, 原則として引用文などは, 現代仮名遣いに改めた。

2. パラオ熱帯生物研究所の概要

パラオ熱帯生物研究所は, 日本学術振興会第 7 常置委員会第 11 小委員会に所属する研究所として, 熱帯生物学, 特に珊瑚礁に関する生物学的研究を行うことを目的に, 当時東北帝国大学教授の畑井新清司を所長に迎えて, 昭和 9 (1934) 年に設立された⁷⁾。

本研究所の研究員には, 日本国内の各大学などから若手研究者が選抜して派遣され, 数ヶ月もしくはそれ以上の期間, 交代で滞在して研究にあたった⁸⁾。これらの研究員の中には, 後に, その分野の世界的

権威となった者も多い。また, 英文論文集が定期的に発行され, 日本の珊瑚礁研究のレベルを世界レベルに引き上げただけでなく, 世界の珊瑚礁研究をリードした点でも非常に意義深い^{注 1)}。

3. パラオ熱帯生物研究所における建物の整備

以下の記述は, 図や写真のみ出典を示すが, 特に断らない限り『科学南洋』と『岩山会会報』による。

設立当初は, 南洋庁水産試験場の一室に間借りしていたが, 昭和 9 (1934) 年 8 月敷地貸下げの許可を受けた後, 昭和 10 (1935) 年 3 月に独自の建物が竣工して移転した。昭和 13 (1938) 年 6 月に発行された『科学南洋』(1-1, pp. 6-7) では, 研究所内の諸設備の概略が次のように記されている。

1. 実験室 平屋建木造家屋一棟 (約 7m×11m)
大実験室, 写真用暗室, 部屋番室
2. 海水タンク 1 個 容量 5 トン
3. 淡水タンク 4 個 容量 9.8 トン (内訳 5 トン 1 個, 1.6 トン 3 個)
4. 物置及び便所 1 棟 (約 5.5m×3.6m)
5. 電動機室及び物置 1 棟
6. 採取船ノパヤ号 (石油発動機 2 馬力半装備)
7. 採集船マンゴー号 (橈及帆装備)
8. 図書
9. 珊瑚標本陳列室
10. 宿舍

現在までに, 入手できた研究所内の配置図は, 科学南洋 (1-3, p. 162), 科学南洋 (2-3, p. 150), 科学南洋 (5-2, p. 179), 日本学術振興会編・発行「特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概 第 3 回」(以下「概要-3」などと略す。) p. 204, 「概要-4」p. 208, 「概要-5」p. 280, 「概要-6」p. 272, 「概要-7」p. 265, の 8 種である。このうち, 科学南洋 (2-3, p. 150) は, 敷地の一部のみであり, 「概要-4」p. 208 は「概要-3」p. 204 と同じものである。これらの配置図から, 研究所内の建物の整備進展状況がわかる。

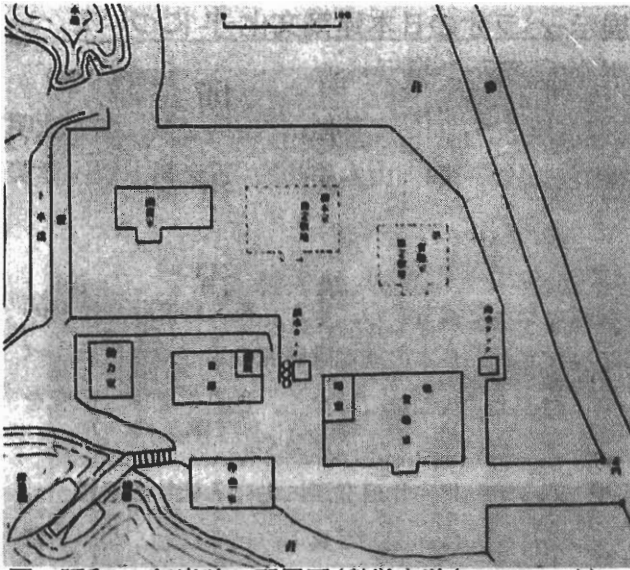


図 昭和13年当時の配置図(科学南洋(1-3, p. 162))

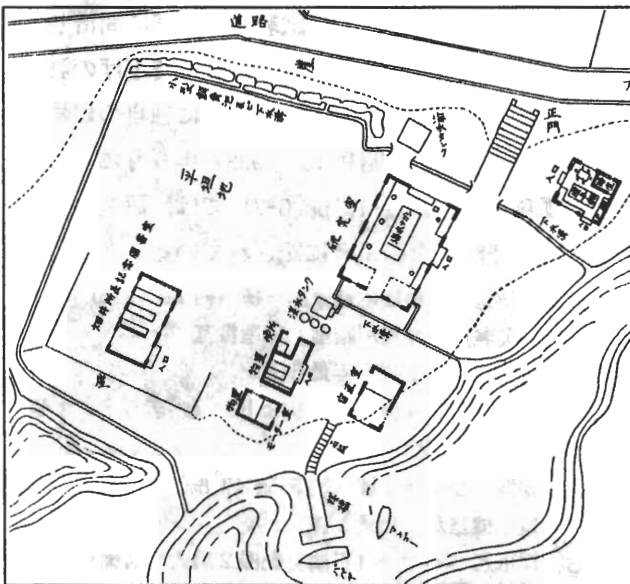


図 昭和17年当時の配置図(「概要-7」 p. 265)

その後、実験室(写真1, 写真2, とともに科学南洋(1-1, 口絵)(研究室とも呼ばれる。内部の「大実験室」と区別するため、以下、研究室と表す。)では何度か改修が行われた。昭和13年5月頃には、据え付け棚を取り除き、通風を良くするために新たに窓を設けた。昭和14年夏には、宿直室のような流し場のような小部屋が改造されて小実験室となった。昭和14年12月には、実験室内の器具薬品戸棚の移転による窓の新設によって研究員の席が2つ増え、今まで3名の研究員でなお狭く感じた室に5名を一時に収容できるようになった。昭和15年夏には、新実験室の建設に伴い、暗室を研究室に改造した。

昭和14(1939)年12月には木造平屋建ての畑井

記念図書室(写真3, 科学南洋(2-1, p. 52))が建設された。これは、所長の畑井が東北帝国大学を定年退官した際の畑井教授退職記念会からの寄附1.962円によって建てられたものである。

昭和15(1940)年には、木造平屋建ての新実験室(写真4, 科学南洋(3-2, p. 46))が建設された(6月9日着工, 11月末(10月末とも)完成)。これは、南洋真珠(株)の寄附によるもので、3間×3間半の大きさで暗室と薬品戸棚を作り、標本棚を置き、応接室も設けた。

しかし、パラオ熱帯生物研究所は、昭和18(1943)年3月に発展的解消を遂げ、マカッサルに新設される海軍総合科学研究所に統合された。その際、建物その他の施設は南洋庁に移管された。

なお、これらの建物の整備には南洋庁が協力していた^{注2)}ことから、当時南洋庁土木課技師(昭和13年までは、技手)であった山下彌三郎¹⁾がその殆どを設計したと考えられる。

2003年8月の調査では、図書室の基礎と玄関ポーチ、門柱、海水タンク、淡水タンクの基礎などが残っていることが明らかになった。



写真1 実験室(研究室) 写真2 実験室(研究室)



写真3 記念図書室 写真4 新実験室

4. パラオ熱帯生物研究所の復元(写真5)

1) 畑井記念図書室

2003年8月に、残存している基礎部分と玄関ポーチの実測を行うことができた³⁾。この実測図面を基準に、科学南洋(2-1, p. 52)(写真3), 同(3-1, pp. 70-71), 山下彌三郎氏所蔵個人アルバムなどの写真を用い、復元した。また、研究所内の配置図に書き込まれていた情報も適宜参照した(以下, 2)一

4)でも同様)。

2) 研究室

科学南洋(1-1,口絵)(写真1,写真2),同(2-3, p.67),同(3-1, pp.67-68),文献9)などの写真を用い,復元した。内部は,科学南洋に掲載された写真や「概要-3」p.204の配置図中の平面図などを参考にして復元したが,模型では表現しなかった。なお研究室は,数度の改修を行っているので,写真が写された時期に注意が必要である。

3) 新実験室

新実験室は,建てられた時期が比較的遅いため写真が少なく,特に背面部分は推測によった。科学南洋(3-2, p.46)の工事中の写真(写真4),同(3-3, p.75)の完成時の写真などを使用した。

4) その他の建物

科学南洋に掲載された写真のほか,当時の各種雑誌に掲載された写真を用い,復元した。

なお,復元模型の製作は,写真などの資料が最も良く揃っており,なおかつ新実験室が完成した後である昭和15年頃の様子を復元した。ただし,地形については正確に復元できてはいない。

5) 現地再調査との比較

2005年10月に,再度現地調査を行うことができた。その結果,研究室,新実験室,物置(便所含む)ならびに電動機室(物置含む)の基礎(現在は,その上に当時のものとは異なる建物を建てている。),船着き場などが残っていることを確認した。また,新実験室の正面から向かって右面には階段があったこと,背面には石積みの擁壁を建設して敷地を広げていたことなどが確認できた。これらの新しい知見は,今回の復元作業には反映されておらず,今後の検討課題である。

5. まとめ

本報では,2005年9月末から06年3月末までの予定で「パラオ国立博物館開館50周年記念特別展示-パラオの日本建築文化-」で展示を行っているうちの,パラオ熱帯生物研究所に関する詳細とその復元模型の製作に関する報告を行った。また,2005年10月の再調査で新たな事実が判明したが,これらの検討は今後の課題である。

謝辞

現地調査の際には,Ms. Veronica KazumaとMs. Felisa Kazumaに,また展示にあたっては,ペラオ国立博物館館長Ms. Faustina K. Rehuherはじめスタッフの皆様,ペラオ青年海外協力隊員(当時)の山口考彦氏,ペラオ日本大使館専門調査員の三田貴氏にご協力いただいた。また,資料収集にあたっては山下彌三郎氏のご子息三長氏にご協力頂いた。なお本報の一部は,平成16-17年度科学研究費補助金(若手研究(B),課題番号16760520)によった。記して謝意を表す。

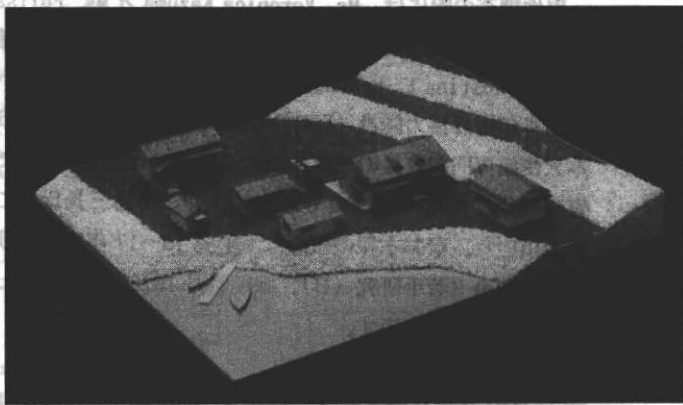
注

注1)1990年に発行されたイシサンゴの生物学に関する集大成と言われる文献(Z. Dubinsky ed.: Coral Reefs, Ecosystems of the world 25, Elsevier, 1990.)でも,ペラオ熱帯生物研究所で行われた研究が数多く引用されている¹⁰⁾。また,文献11)でも,ペラオ熱帯生物研究所を扱った項では,「世界有数の研究所」,「世界的に有名な研究成果を次から次へと生み出す」,「世界の注目を集めるのに十分」,「世界をリードした研究業績」などの言葉が並んでいる。

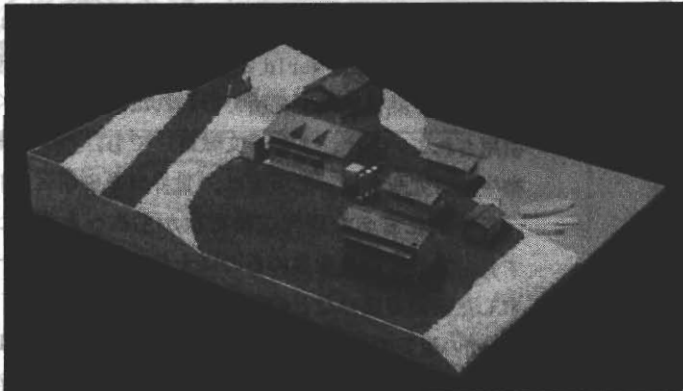
注2)今回の復元では,対象とはしなかったが,昭和17(1942)年4月に竣工した所長官舎の設計図は南洋庁土木部によるものであり,施工は矢島組(本店:東京市)の南洋支店(コロール町)であった¹²⁾。

参考文献

- 1) 辻原,今村,香川:パラオ・コロールにおける日本委任統治時代の建築物の残存状況と旧パラオ支庁庁舎,日本建築学会九州支部研究報告,第42号・3【計画系】,pp.609-612,2003.3.
- 2) 辻原,今村,香川:旧パラオ医院本館と旧南洋庁観測所および気象台庁舎について,日本建築学会九州支部研究報告,第42号・3【計画系】,pp.613-616,2003.3.
- 3) 辻原,今村,岡本:パラオにおける日本委任統治時代の建築物に関する2003年と2004年の調査,日本建築学会九州支部研究報告,第44号・3【計画系】,pp.749-752,2005.3.
- 4) 坂野徹:パラオ熱帯生物研究所-その誕生から終焉まで-,化学史研究,Vol.22,pp.180-196,1995.
- 5) 大森信:パラオ熱帯生物研究所,日本における珊瑚礁研究I,pp.7-12,2002.
- 6) 元田茂:『かつてありしパラオ熱帯生物研究所』-その使命と成果-,太平洋学会誌,pp.7-29,1981.10.
- 7) 日本学術振興会:特別及ピ小委員会ニヨル総合研究ノ概要,第3回,日本学術振興会,pp.189-204,1938.5.
- 8) 元田茂:パラオ熱帯生物研究所-創生から終焉まで-,岩山会会報,第9号,pp.30-36,1968.12.
- 9) 岩山会:パラオ熱帯生物研究所年表,岩山会会報,第10号,pp.27-40,1972.9.
- 10) 南洋群島文化協会,南洋協会南洋群島支部編:南洋群島写真帖,南洋群島文化協会,南洋協会南洋群島支部,p.116,1938.10.
- 11) 元田茂:夢の研究所記念碑,岩山会会報,第18号,pp.3-6,1993.12.
- 12) 森啓:サンゴ ふしぎな海の動物,築地書館,pp.83-87,1989.9.
- 13) 加藤源治:南の島あちこち,岩山会会報,第13号,pp.3-7,1981.7.



畑井記念図書室



新実験室



研究室

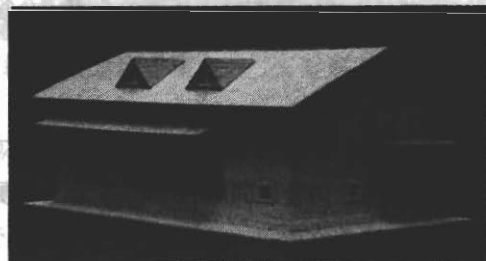


写真5 パラオ熱帯生物研究所復元模型

- *1: 熊本県立大学環境共生学部
- *2: 熊本県立大学環境共生学部 助教授・博士(工学)
- *3: アトリエ イマージュ
- *4: 熊本県立大学環境共生学部 助手・修士(工学)

- Prefectural University of Kumamoto
- Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
- Atelier Image
- Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. Eng.